



： 卷 頭 言 ：

「俳句と農業」

(公財)日本植物調節剤研究協会 評議員
日本曹達株 農業化学品事業部 農業化学品開発部長 岡本隆之

6月9日に関東地方も梅雨入りし、長雨の季節に入りました。俳句の世界では旧暦ですので5月、6月、7月が夏となりますが、田植え、雑草、草取(除草)などを夏の季語として多くの句が詠まれています。

そのなかには「夏草や 兵共が 夢の跡」,「田一枚植えて立去る柳かな」という芭蕉の有名な句があります。夏草の句は芭蕉が奥の細道紀行で平泉の古戦場跡を訪ね、藤原三代の栄華や義経主従の悲劇をしのいだものですが、やはり青々と生い茂った夏草でこそ夢のはかなさが際立つのでしょうか。田植えをうたった句は、芭蕉が奥州に入る前(6月の初め)に、平安時代末期の歌人西行が訪れたと言い伝えのある土地(現在の栃木県那須町)を立ち寄りよんだ句です。地元では毎年 芭蕉のよんだ柳の近くで、田植え祭りがおこなわれ、昔ながらの紺のかすりに茜だすきを掛けた女性が、田植唄にあわせて早苗を植えます。

一方 江戸時代後半の俳人 小林一茶には「米国の上々吉の暑さかな」という晩年の句がありますが、米の豊作を約束するすばらしいものとして夏の暑さを詠んだものです。芭蕉の風流さとは異なり、農民に寄り添いながら生きた俳諧師である一茶らしい句です。

現代の俳人として人気があり、放浪の旅のなかで自由律の名句を残した山頭火には「雑草は一人がよろし」「やっぱり一人はさみしい枯草」など雑草を題材に自分自身をみつめるような句があります。

農耕民族である日本人にとって、農作業や雑草はみじかにあって季節感を感じるものであったため、江戸時代から現代にいたるまで これらを題材に多くの句が生まれました。季語にも農業をさすものや雑草に関する物がたくさんあります。

春：苗床、苗代、田打、畔塗、芋植う、蚕飼、桑飼、茶摘、ぎしぎし、雀の鉄砲

夏：代掻、田植、青田、早乙女、余り苗、麦刈、

草取、田草取、夏草、蚊帳吊草
秋：菜種播く、大根播く、煙草干、豆ひく、棉取、
稲刈、稲架、稲扱、粃、狗尾草
冬：大根引、大根干、切干、蕎麦刈、蒟蒻掘、
蓮根掘、温室、冬蒔

こうしてみると農業の技術、風俗が変化し季語としては将来うたわれなくなるとされるものもありますが、逆に温室、ビニルハウスなどが新しい季語としてとりあげられています。雀の鉄砲、蚊帳吊草や狗尾草などの雑草たちもしっかりと俳句歳時記に記載され、俳句によまれています。現代の農業技術の中に定着し、農作業の改善に貢献している種子消毒や除草剤の施用などいずれは季語になっていくのでしょうか。またそうあってほしいものだと考えをめぐらしました。

今年3月に初めてブラジルを訪問し、大豆畑などその規模の大きさに感銘を受けたのですが、多くの日系人の住むブラジル社会で俳句がどのように普及し、農業はどのようにうたわれ、季語をどのように扱っているのか気になり、少し調べてみました。1927年にブラジルに移住した高浜虚子の弟子である佐藤念腹が、厳しいコーヒー農園での仕事に従事しながら、大自然や農園での生活を題材に句作に励み、ブラジルにおける俳句普及の礎をつくり、後にはポルトガル語で創作するHaikaiとなって新しい流れが生まれ、世界でも有数の俳句大国になっています。ブラジルは熱帯及び亜熱帯気候ですが、日系人はやはりそこにも敏感に季節の変化を感じ取り季語を用いるとともに、ブラジル歳時記もまとめられています。

今後も地球の反対側にある日本とブラジル、気候、風土、農業のおかれている状況も大きく異なりますが、それぞれのかたちで農業が持続発展し、現代の人々の生活にかかわるものとして、今後も俳句のなかでうたいがれていくことを願っております。